

「～テアゲル」¹の対人的な機能についての一考察

山本裕子*

キーワード: +恩恵性, -恩恵性, 上位者, 親しさ, 話し手の「立場」の認識

要旨

本稿は授受補助動詞のうち、行為に伴う恩恵の授与を表すとされている「～テアゲル」の談話における対人的な機能について論じたものである。

本稿では「～テアゲル」は恩恵の授与を表す「+恩恵性」の「～テアゲル」と、恩恵の授与を表すわけではない「-恩恵性」の「～テアゲル」とに区別する。また、「～テアゲル」には、

a) 行為者(A)のほうが恩恵の受け手(B)よりも相対的に上位に位置する

b) a)により、「～テアゲル」が用いられる人間関係には制約がある

という、二つの語用論的な性質があり、これらのどちらに焦点があるかによって異なった機能を持つと考える。

「+恩恵性」の「～テアゲル」は①「A(行為者)がB(行為の受け手)より上位にあるという話し手の認識を示すもの」と②「AがBを親しい関係にあるという話し手の認識を示すもの」に区別できる。これらはプラスに作用すると、聞き手に対して、①は頼もしさ、安心感、②は親近感といった語用論的効果をもつ。しかし、「恩着せがましい」等マイナスに作用することもあり、話し手と聞き手の関係性によって「～テアゲル」の運用は左右される。またこれらは話し手と聞き手の関係性を調節するような役割を果たしている。

「-恩恵性」の「～テアゲル」は③「話し手が専門的な立場で関わっていることを示すもの」と、④「話し手の思い入れを示すもの」に区別できる。これらは話し手が事態に関わる立場をどう認識しているかを示すものとなっている。

「～テアゲル」は他の授受補助動詞と同様、恩恵性を利用して聞き手に対する関係性の調節をするような機能(+恩恵性の場合)と恩恵性の表示ではなく、状況における話し手の立場についての認識を示すような機能(-恩恵性の場合)に区別できる。またこのような言語運用を通して、話し手と聞き手は互いの関係性の認識を確認し合い、共有の基盤を形成していると考えられる。

* YAMAMOTO Hiroko: 名古屋女子大学非常勤講師。

¹ 「～テアゲル」は「～てやる」「～てあげる」「～てさしあげる」の3語を指すものとする。

1. はじめに

授受補助動詞²は「行為に伴う恩恵のやりとりを表す」とされ、授受補助動詞に関する先行研究は多数あるが、運用上の問題について扱っているものはそれほど多くない。本稿では「～テアゲル」を取り上げ、その対人的な機能について論じる。「～テアゲル」は「A ガ B ニ V テアゲル」という形式で用いられ、話し手(側)のする行為に伴って、恩恵を授与することを表すものとされている。そして、運用においては「相手に敬意を表したい場合には適切な表現ではない。一般に、『～てあげる』は『～てもらう』や『～てくれる』に比べて使用頻度が低い(益岡・田窪 1989: 77)」に代表されるように、日本語教育では「恩着せがましく」聞こえることがある(城田 1996)ので、目上に対する場合をはじめとして、「～テアゲル」の運用には気を使うべきであるという指導がなされる。

しかし、実際、日常的に「～テアゲル」はまったく用いられないわけではなく、むしろある場面では積極的に用いられる。また、「～テアゲル」は使用しないほうがよく、「～テクレル」や「～テモラウ」を用いたほうが待遇上望ましい、というのは Brown & Levinson (1987) (以下 B & L とする)のポライトネス理論³で言えば Negative Politeness (以下 NP とする)にのみ注目したものであり、対人的な機能を考える上では不十分だと思われる。本稿ではこのような点を踏まえ、「～テアゲル」の対人コミュニケーションにおける機能について考察を行う。具体的には客観的に見て行為に伴う恩恵のやりとりがある場面での「～テアゲル」の使用の有無、逆に恩恵のやりとりがない場面での「～テアゲル」の使用の有無に注目し、どの形式がどんな場面で用いられ、どんな機能を果たしているかを分析する。なお、「～テアゲル」には非恩恵的な用法⁴もあるが、本稿では扱わない。

² 授受補助動詞とは「～テクレル」「～テモラウ」の3系列とそれぞれの待遇形を含む、七つの語の総称とする。また本稿では「～テクレル」のようにカタカナで表記する場合、それぞれの活用形、待遇形も含めたものとする。すなわち、「～テクレル」は「～てくれる」「～くださる」の活用形、「～テモラウ」は「～てもらう」「～ていただく」の活用形、「～テアゲル」は「～てあげる」「～てやる」「～てさしあげる」の活用形をそれぞれ含むものとする。

³ B & L ではポライトネスを人間関係を円滑にするための対人コミュニケーション行動と捉えている。人間の基本的欲求として「フェイス(face)」という概念を定義し、「他者に理解されたい、好かれたい」等のポジティブフェイスと、「賞賛されないまでも少なくとも他者に邪魔されたり、立ち入られたくない」というネガティブフェイスがあるとしている。そしてポジティブフェイスを満たすポライトネスストラテジーをポジティブポライトネス(以下 PP)、ネガティブフェイスを満たすポライトネスをネガティブポライトネス(以下 NP)としている。詳しくは B & L (1987) のほか、宇佐美 (2001, 2002) 等を参照。

⁴ 非恩恵的な意味を表す「～テアゲル」とは「ぶん殴ッテヤル」や「文句を言ッテヤル」のように恩恵的でない行為に対して用いられる「～テアゲル」を指す。

2. 先行研究

授受補助動詞についての先行研究は多数あるが、「～テアゲル」の談話における機能に言及しているものは少ない。本節では「～テアゲル」に関して言及のある橋元(2001)、城田(1996)、金久保(1993)について述べる。

橋元(2001)はリーチ(1987)の「気配りの原則」を日本語に適用し、日本語におけるコミュニケーション上のルールについてまとめている。そしてそれには授受表現の使用が関わっているとし、次の二つの原則を提案している。

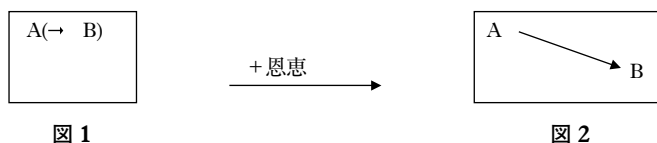
(1) 恩義強調の原則: 相手が施す恩恵もしくは依頼者に生じる義理を最大限言明せよ。

(2) 互酬性に基づく親密さの原則: 自分が施す恩恵を言明し、相手に義理感情を派生させることにより、絆の深さが確認され、関係の親密さがアピールできる。

(1)は「～テクレル」や「～テモラウ」の使用に関わる原則である。橋元(2001)では「私に本を送っていただけますか」や「私に本を送ってくださいますか」のように相手の行為に関して「～テクレル」や「～テモラウ」を用いて表現することにより、「相手から私に対する恩恵が施されることが明示され、同時に受益者の私に義理が発生することも含意されている(pp. 49-50)」と述べられ、また「～サセテイタダク」についても相手の労に対する気配りを示すものとされている。そして(2)が「～テアゲル」に関するものである。「弁当を作ってきてあげようか」のようなものは(1)には反する。しかし、これは(2)に基づいて使用されており、そのため親しい間柄でしか使えないものとなっていると橋元(2001)は述べている。以上のように橋元(2001)は語用論的な原則をたて、授受補助動詞の運用上のルールを示している。確かに「～テアゲル」の使用によって、親しさを表すことが可能な場合もある。しかし、親しさを表しているとは言えない場合も明らかにある。橋元(2001)では二つの原則の使用条件が示されておらず、不十分なものと言える。

これと同様のことは金久保(1993)でも指摘されている。金久保(1993)は日本語の授受補助動詞の運用上の傾向として、まず「～テモラウ」「～テクレル」のように自分の立場を下にするものが用いられる傾向が強いことを指摘している。そして、「～テモラウ」や「～テクレル」と異なり、「～テアゲル」は「話し手である自分が立場が上であると言語として表現する(p. 66)」ものであるため、使用に制約があると述べている。しかし、具体的にどのような制約があるかについては述べられておらず、これも不十分なものである。

城田(1996)は授受(補助)動詞や「行く・来る」を話場態とし、「～テアゲル」は内から外へ向かうもので、一人称から二人称に向かうものや二人称から三人称に向かうものは、実現が少なく、恩着せがましく聞こえると述べている。しかし、どんな場合に、なぜ「恩着せがましく」聞こえるのか等の詳しい考察はされていない。また、城田(1996)は恩恵性の表示よりも「(事態



の関与者の)関係性の規定」という面から、授受補助動詞を「行く・来る」と一括りにしている。つまり、これらの形式が示す「内」や「外」は所与のものではなく、発話の場で相対的に決定されるものであり、授受補助動詞は「動作や状態の関係者の存在の明示 (p. 6)」であるというのである。本稿でも城田 (1996) と同様に、授受補助動詞は事態に関わる人物の相対的な関係を発話時において規定するものであると考える。そして、事態に関わる人物の関係が、どのような場合に、どのような授受補助動詞が用いられるか、また、それらは対人的にどのような機能を果たすのかという点にも踏み込んで考察をしたい。

以上、先行研究では「～テアゲル」については非常に限定的な扱いをしており、議論が十分になされていないことを指摘した。

3. 授益表現「～テアゲル」の本来の意味・用法

「～テアゲル」は「A が B に V テアゲル」の形式で、A が行う V という行為によって、B が恩恵を受けると話し手が捉えていることを表す。行為の内容によって、その「人目当て」性に直接の場合と間接的な場合がある⁵が、いずれも上のように図示することができる。

図 1 の矢印は行為の向かう方向性を表す。(→) は B が間接的な影響を受ける場合である。行為に「恩恵」を感じる場合、図 2 に示したように行為の仕手 A の立場が B よりも相対的に高くなり、A—B は対等な関係とは言えなくなる⁶。同時に行為者 A は恩恵の「与え手」という役割を、B は恩恵の「受け手」という役割になり、A は「親切」、「いい人」等のプラスの価値を帯びる。これは「～てあげる」だけでなく、「～てやる」「～てさしあげる」の三つの形式すべてに当てはまる。

⁵ 山田 (2000) は授受補助動詞構文には直接構造と間接構造があると述べている。直接構造とは (33) のように行為の方向性と恩恵の方向性が一致しているものである。(33a) では (33b) とは異なり、事態が恩恵的であると「私」が認識していることが明示されている。

(33) a 田中は私に本を売ってくれた。(=原文では (10))

b 田中は私に本を売った。

(34) a 田中は私のために走ってくれた。

b 田中は走った。

これに対し、間接構造では (34b) に示されるように事態に「私」は直接的には関わっていないが、「私」が事態を恩恵的であると認識することによって「～テケレル」が用いられる。

⁶ 与え手と受け手が対等な関係ではなく、上下関係にあることは宮地 (1965)、金久保 (1993) にも指摘がある。

- (3) 弟に本を読ンデヤッタ。
 (4) 田中さんに説明シテアゲタ。
 (5) 先生は目が不自由なので本を読ンデサシアゲタのですが、とても喜んでくださいました。

(3)～(5)では、話し手と「弟」、話し手と「田中さん」、話し手と「先生」との関係によって「～てやる」「～てあげる」「～てさしあげる」の選択がされているが、「本を読む」という行為における話し手と「弟」「田中さん」「先生」は、話し手が授益者で弟・田中さん・先生が受益者であることにはかわりはない。つまり A と B の社会的な関係によって待遇形の選択がなされるのであって、当該の行為における A と B の関係については A が上位で B が下位という関係に一元化できる。

このように、「～テアゲル」は行為者に視点がおり、かつ行為者は話し手側であることが多いので、「～テヤル」によって、話し手側が立場が上位であることが明示されてしまう。そのため、「～テアゲル」の運用に際しては、A—B の関係がどのようなものであっても、制約なく自由に用いることができるわけではない。しかし、例えば親子⁷のように年齢的に絶対的な立場の相違がある時や、動物に対する場合のように絶対的な能力差がある時には、次に示すように無理なく「～テアゲル」が使える。

- (6) 小さい子が自分で服を着ようとしているが、うまくいかない。

子: お母さん、できないー。

母: ああ、いいよ、いいよ。お母さんヤッテアゲルから。

- (7) A: 趣味は?

B: 音楽! それと隠れ趣味として伝書鳩の飼育。

A: へーえっ!

B: 故郷を立つ時、泣く泣く全部離してやった。(『東京ラブストーリー 1』: 21)

A と B は (6) では母と子、(7) では話し手と飼っていた鳩という二者である。受け手側、つまり (6) では子どもであるが、年齢的に当該の行為を実現する能力がなく、A とは行為の遂行能力に相違がある。また、(7) では話し手は飼い主として鳩に対して主導権を握っている。このように立場に絶対的な上下関係がある場合、「～テアゲル」を無理なく用いることができる。しかし、そうではない場合、特に聞き手に直接的に「～テアゲル」を用いるのは、先行研究でも指摘されている通り、待遇的な観点からすると原理的に望ましくないことであろう。よって「～テアゲル」が用いられるのは、A—B、話し手—聞き手、さらにその両者、といった事態に関わる人物の関係性を考慮した上で、対人関係上のリスクを上回る表現効果があると判断される場合と考えられる。

⁷ 「親子」といっても成人し、独立した子どもではやはり使いにくく、小さくて親の手が必要な年齢の子どもの場合に、より適切性が高いように思われる。

結論を先に言えば、本稿では次の二通りの場合に、「～テアゲル」が用いられると考える。

- (8) a: A—B が何らかの意味で「上下関係」にあると話し手が認識している場合
 b: A が B より上位にあることを「恩着せがましくなく」述べられるほど「親しい関係」にあると話し手が認識している場合

以上を踏まえ、次節では談話において「～テアゲル」が A—B がどんな関係の場合に用いられ、どんな対人的な機能を果たしているかについて述べる。

4. 「～テアゲル」の対人調節的機能

本節では「～テアゲル」が実際の談話において、持っている対人的なコミュニケーション機能について論じる。

4-1. 恩恵性の有無

実際の「～テアゲル」の使用例を観察すると、恩恵的な意味が感じられる「～テアゲル」と恩恵的な意味があまり感じられないものがある。本稿ではこれらを区別して扱い、前者を「+恩恵性」の「～テアゲル」、後者を「-恩恵性」の「～テアゲル」⁸ とする。

金久保 (1993) は授受補助動詞の表現機能を「恩恵」とし、授受表現には「+恩恵」と「-恩恵」の二種類が区別できるとしている。

1. 「行為のやりとり」を表わす際、「恩恵」の表現機能を積極的に選択して授受表現を用いる場合
 (9) 応援してくれて、本当にありがとう。(=原文は(16), 下線は筆者)
 2. 直接受け身表現や「働きかけの使役」表現の使用を避けるために、授受表現を用いる場合
 (10) 次は後藤君に読んでもらいましょう。(=原文は(17), 下線は筆者)
2. のような場合は「行為のやりとり」における与え手と受け手の上下関係や、「恩恵」の表現機能を積極的に認める必要がない。1と2の二種類の授受表現をそれぞれ「+恩恵」「-恩恵」と呼ぶことにする。(金久保 1993: 22)

金久保 (1993) は 2. について「後藤君に本を読ませよう」や「後藤君に本を読まれた」のように使役や受け身を用いると人間関係上マイナスの意味を生じるため、それを避けるために「～テモラウ」や「～テクレル」を使用すると述べている。つまり「行為のやりとり」で話し手が受け手の側に立つ場合に、受け身や使役表現ではマイナスの意味が含まれてしまうので、それを避け

⁸ ここでいう「-恩恵性」の「～テアゲル」とは非恩恵的な意味の「～テアゲル」とは異なるものである。

るために、授受表現を使用するものを「-恩恵」としている。確かに次のような場合、金久保(1993)の言うように、授受表現と受け身、使役のいずれの表現も可能である。

- (11) ゼミで当たった順番について述べている
- a その次に、後藤君に読んでもらいました。
 - b その次に、後藤君に読まれました。
 - c その次に、後藤君に読ませました。

(11) は、どの表現も可能ではあるが、話し手と後藤君の関係、話し手の事態に対する認識はそれぞれ異なっている。確かにマイナスの評価を特にしていない場合は、一番「安全」な選択として、(11a)のような授受表現が用いられると言えるかもしれない。また、Obana (2000: 153-155)も間接受身では迷惑というマイナスの評価が表されるので、それを避けるために能動態があると述べている⁹。しかし、「～テアゲル」のように話し手が与え手側に立つ場合は当然、受け身や使役は不可能であるので、受け身や使役を避けるために「～テアゲル」が用いられるということはあるにない。よって、これは「-恩恵性」の「～テアゲル」の判定テストとしては有効ではない。

本稿では「+恩恵性」「-恩恵性」を「事態が恩恵的である」ことを保持しているかどうか、という意味的な規定をする。また、どのような状況で、どのような相手に対して発話するのかによって、選択される語・表現は異なるはずであり、人間関係が表現選択のポイントとなると考える。このような観点から、以下では、3.で述べた人間関係、つまりA—B、話し手—聞き手、その両者、という関係に注目して、「～テアゲル」がどのような機能を持つかを分析していく。

4-2. +恩恵性の「～テアゲル」

4-2-1. ① AがBより上位にあるという話し手の認識を示すもの

行為者Aのほうが受け手Bよりも力関係において上位にあるという話し手の認識を示すものである。ここでは、(6)(7)に示したような親—子、対動物のように客観的に見て上下関係にあると判断されるような関係ではなく、心理的に上下関係がある場合について扱う。

まず、A—Bが話し手—聞き手である場合、つまり話し手が聞き手より上位にあるという話し手の認識を聞き手に直接的に示す場合を見る。

- (12) オートレースで勝って
- 冬子: ね、私がおごってあげる、二千円もとったのよ。

⁹ Obana (2000) は行為者が目下で行為が期待していなかったもの場合は、「子どもに教えられるとは思わなかったわ」(=2-69)のように受身も用いられることや、期待していない行為で、かつ行為者が知らない人の場合は、「きれいな人に座られてうれしそうだ」となること、つまり受身形が必ずしもマイナスの意味とは限らないことを指摘している。これによって話し手と行為者との関係性によって、表現の選択や、その意味が変わってくるのがわかる。詳しくは今後の課題とする。

寅：でも、こんなきたねえとこいいんですか… (『寅さん』)

(13) 永尾は友人三上に電話でおいしいフランス料理店を教えて欲しいと頼んでいる。

三上: お、完治か。え？ なに？ おいしいフランス料理の店？

ムードがあってセンスがよくて女の子にうけそうな…ねえ。

永尾: 三上なら東京はおまかせ、だろ？

三上: 神宮前におススメのがある…な。すぐマンパイになるけど、俺なら顔きくから予約入れといてやるよ。 (『東京ラブストーリー 1』: 84)

(12) は女性のほうが強い立場である。そのことはスタイルの差に現れている。冬子が「だ体」で話しているのに対し、寅は「ですます体」で話をしている。(13) は友人同士の発話であるが、情報量の面で差があり、心理的に上下関係がある。これらを「～テアゲル」を伴わないものと比較してみよう。

(12') 私がおごる、二千円もとったのよ。

(13') 俺なら顔きくから予約入れるよ。

この場合、話し手の行為に聞き手がどのように関わるかは表現されない。「～テアゲル」文では、当該の行為において、話し手が聞き手より立場が「上」で、聞き手が話し手よりも立場が「下」の者として関わっているという話し手の認識が言語的に示されている。もちろん「～テアゲル」を伴わない場合でも、スタイルや「俺なら顔きくから」といった言葉の端々に話し手の上位者意識は窺えるのだが、「～テアゲル」を用いることによって、その意識が一段と補強されて表現される。

また A—B が、話し手—聞き手ではなく、聞き手—第三者という場合もある。

(14) (貴重なコンサートのチケットを渡しながら)

せっかくだから行ってあげたら？ 手に入れるのすごく大変なチケットらしいわよ。

(『サラリーマン金太郎』シナリオ)

(15) あいつの気持ち、分かってやってください。 (『お受験』シナリオ)

どちらも聞き手の第三者に対する行為について「～テアゲル」が用いられている。この行為によって、第三者が恩恵を受けるわけだが、その実現の可否は聞き手に委ねられている状況である。「～テアゲル」を用いることにより、話し手が「受け手(第三者)が喜ぶような行為ができるなんて(聞き手は)とても親切だ」と認識していることが示される。また、これは話し手が聞き手にその行為を実現するよう、依頼している場面でもある。よって、「～テアゲル」を用いることが、聞き手を上位者として持ち上げることになり、「依頼」という発話行為に適したものとなっている。このことを「～テアゲル」を用いない場合と比較して確認してみよう。

(14') せっかくだから行ったら？

(15') あいつの気持ち、分かってください。

(14') (15') には第三者の評価は含んでおらず、あくまでも話し手は話し手の立場で聞き手に依

頼をする表現になる。しかし(14)(15)のような「～テアゲル」の文では「聞き手」対「話し手と第三者」という関係になっている。つまり、話し手が、「内」「外」意識において、聞き手とは異なるところに属しているという認識を「～テアゲル」によって明示し、かつ聞き手を受益者として持ち上げていることになる。よって「～テアゲル」のほうが、依頼という発話行為においては、聞き手のフェイス¹⁰に配慮したものとして、適切である。

依頼以外の文脈では、どうであろうか。

(16) コンサート、行ってあげたんだね。

(17) コンサート、行ってくれたんだね。

話し手が聞き手側に立つか、第三者の側に立つかによって、「～テアゲル」が用いられるか、「～テクレル」が用いられるかが異なる。第三者側に立つ場合は「～テクレル」が用いられるが、(14)(15)で見たように、依頼の場合は話し手と第三者を同じ側に括るのは「～テクレル」ではなく「～テアゲル」である。よって、依頼のように聞き手を持ち上げる必要がある場合は、通常と異なるシステムで語の選択がなされることがわかる。このように「～テアゲル」は必要に応じて、相手を持ち上げる機能を果たしている。これは B & L (1987) など「ポライトネス理論」における Positive Politeness (以下 PP と表記する) の一つの現われと考えられる。

4-2-2. ② 「親しさ」を示す「～テアゲル」

次に「～テアゲル」が、A—B が「上下関係」にあるという認識ではなく、行為者 A が行為の受け手 B と「親しい関係にある」と話し手が認識していることを示すものについてみる。まず、A—B = 話し手—聞き手である場合、つまり、話し手が聞き手とは親しい間柄にあると見ていることを表す場合を見てみよう。

(18) 赤名リカと永尾完治は同期入社した同僚である。

赤名: (工作中, いきなり) そうだっ!!

永尾: (驚いて) なんですか?

赤名: これから永尾くんのこと、カンチって呼んだげる。

永尾: (むっとして) 僕は永尾完治です。 (『東京ラブストーリー 1』: 5)

「～テアゲル」を用いない場合、次の(19)のような表現が考えられる。

(19) a カンチって呼ぼうと。

b カンチって呼ばせて。

c カンチって呼んでもいい?

(19a) は話し手の一方的な意志を宣言したものである。これに対し、(19b) (19c) は聞き手に

¹⁰ 3 参照。

許可を求める形式となっており、聞き手がどのように受け取るかを配慮している。つまり(19a-c)は聞き手のフェイス(face)に対する配慮の仕方が異なるものであるが、「カンチと呼ぶ」ことを聞き手がどう評価するかということについてはいずれも表現していない。一方(18)のように「～テアゲル」が用いられている場合、聞き手の受け取り方に対して話し手のどう認識しているか、も含めて表現している。つまり、聞き手が「カンチと呼ばれる」ことを「嬉しく思う」「感謝する」というように話し手が捉えていることを表す。これは話し手が聞き手に対して、聞き手の気持ちがわかるほど近い関係であると見ていることの表れと考えられる。次の例で確認しよう。

(20) 高校の同級生である、関口さとみ、三上、永尾が、さとみの同僚北川先生と一緒に4人で飲んでいる。

北川: あらー、三上さんてモテルんだー。ね、どんなことしてるの、女のコに？

三上: この人がいなくなったら教えてあげる。

関口: 三上くん！

(『東京ラブストーリー 1』: 95)

三上は北川先生に向かって発話しているが、「この人」=さとみがそれを聞いていることを意識している。さとみに聞こえるように、わざとやっている。よって、表面上の聞き手は北川先生であるが、三上にとっての真の聞き手は「さとみ」であるとも言える。ここでは「～テアゲル」を伴わない「この人がいなくなったら教えるよ」よりも、(20)のように「～テアゲル」を伴った表現の方が、「さとみよりも北川先生と親しい関係にある」と話し手が見ていることがより感じられ、効果的な発話となっている。話し手の相手に理解してもらいたい、近い関係でいたい、という気持ちの表れであるので、このような「～テアゲル」もPPと考えられる。

また、第三者間の行為を評して用いられる場合もある。

(21) あの後ね、あの人、**さんを送っていってあげたんだよ。

これを「～テアゲル」を用いないものと比較してみよう。

(21') あの人、**さんを送っていったんだよ。

どちらも「(送った)んだよ」が用いられていることから、「**さんを送っていく」という行為が必要ではなく、過剰なものと話し手が認識していることが感じられるが、(21)のように「～テアゲル」を伴う表現のほうが、より一層、それは明確に感じられる。また、それだけでなく「あの人**さんに好意を持っている」と話し手が見ていることも表される。

以上、「～テアゲル」を用いることによって、AとBが親しい関係にある、と話し手が認識していることを表すことができることを述べた。

4-2-3. 「恩着せがましい」「威張っている」ととられる「～テアゲル」

① ② のように「～テアゲル」が単に恩恵性の表示としてではなく、「上位である」や「親しい」といった話し手の認識を示すものとして用いられることを述べた。これらの語用論的な意味

はプラスに受け取れるものである。しかし、一方で「～テアゲル」は恩着せがましく聞こえたり、威張っていると受け取られることもしばしば指摘されている。これは当該の事態を話し手と聞き手がどのように評価するか、その一致の度合いによると考えられる。メイナード(2001)は発話の機能を分析するにあたって、談話分析の手法を応用している。「話者交替ルール」を検討するのもそのひとつであるが、発話の参加者の交替の仕方、発話の内容をみることによって、談話の展開が分析できる。これにならって、「～テアゲル」を用いた発話に続く発話を見てみよう。①の例、(12)(13)ではいずれも聞き手は受け入れている。つまり双方にとってその事態は「受け手側にとって恩恵性のある事態」である。しかし、②の(18)のように聞き手の見積もりが話し手のものとは異なる場合、聞き手は拒絶をする。(18)では赤名の発話に対して、永尾は「僕は永尾完治です。」と答えている。永尾の「僕は永尾完治です」という応答は、内容的にも赤名の申し出を拒絶するものであるが、主語・述語のそろった完全文であり、またスタイルとしても「～です」が用いられていることから、赤名の接近に対して心理的な抵抗があることを示している。また次の(22)も永尾は赤名の接近に困惑しているため、赤名の発話に答えていない。無言の抵抗である。

(22) 永尾がオフィスの自分の席に戻ってくると、赤名が永尾の席に座っていて、永尾を見つけて手を振る。

永尾: 人の席に勝手に座るな!

赤名: ああ、あつためといたげたのよ。

永尾: ...

赤名: いすのクッション通してあたしのぬくもりがカンチのお尻に伝わるでしょ。うふふ?

永尾: ... (とりあえずこいつをなんとかしなきゃ) (『東京ラブストーリー 1』: 81)

このように、状況に対する評価が話し手と聞き手で異なる場合、聞き手は何らかの手段でそれを表現する。しかし、事態に聞き手が直接関わらない場合には、話し手の見積もりと異なる見積もりを聞き手が持っていたとしても、(18)や(22)のように明示的には拒絶や不満を表明したりはしないだろう。「～テアゲル」を用いた発話を聞いて「威張っている」とか「恩着せがましい」と思ったとしても、それを明確に否定しない場合もあるだろう。(12)や(13)では聞き手は特に不満を表明したりはしていないが、話し手に対して「威張っている」のようなマイナスの印象を抱いている可能性は否定できない。「～テアゲル」の運用に関しては、日本語教育においても「用いないほうが安全だ」という指導がなされるが、このこともそのような指導がなされる一因となっているだろう。

4-2-4. 「～テアゲル」の非用

前節で述べたように、「～テアゲル」は状況によっては使用しないほうがいい場合もある。そうした場合、どのような方策がとられているのだろうか。本節ではいかに「～テアゲル」を避けて、違う形式を用いるかを見ていく。

「～テアゲル」は恩恵の授与であることから、主格に立つ側が上位にあると感じさせやすい。よって、話し手が明らかに社会的に下の立場のときには「～テヤル(～テサシアゲル)」は用いることができない。この場合、「～サセテイタダク」のような使役形が用いられる。

(23) 仕事の分担をしている場面

A: 誰か、これやってもらえませんか。

(誰も返事をしないのを受けて)

B: じゃ、私がヤラセテイタダキマス。

(23) のように「～サセテモラウ(いただく)」を使用することによって、行為者、受益者の立場は反転する。この場合、B が名乗りあげたことで他の人々は分担を免れるため、B は授益者といえるが、ここでは次のような「～テアゲル」文は用いられないのが普通であろう。

(23') じゃ、私がヤッテアゲマス。

また、(23) のように社会的な上下関係がなくても、話し手から申し出をするような場合に、(24) (25) のように行為者、受益者の立場を反転し、聞き手が申し出を受け入れやすくすることは多い¹¹。

(24) 何かプレゼントサセテ。

(25) 私に払ワセテ。

友達同士であっても、話し手が一方的な好意で何らかの行為をする場合、立場を反転させることによって、聞き手は話し手の申し出を受け入れやすくなる。

また「～テアゲル」では受益者が明示されてしまうため、「～テアゲル」を使用しないことによって、恩着せがましきなどマイナスの意味を避けることができる。まず、「～テアゲル」や「～テオク」を用いる場合を見てみよう。「～テアル」や「～テオク」には「準備」とされる用法がある。この「準備」は特に「誰のため」ということを示すものではない。「～テアゲル」では「あなたのために」が明示されてしまうが、「～テアル」や「～テオク」を用いることによって「私たちのため」と受益者を曖昧にすることができる。次の例を見られたい。

(26) 社長が会社が倒産することを社員の一人に告げて、

社長: お前たちには迷惑をかけることになってしまった。

社員: 給料減ってもかまわないからやりましようよ。

¹¹ 話し手が一方的に申し出る場合は「～テアゲル」ではなく、常に「～サセテイタダク」ということでは、もちろんない。②のように「親しさ」に訴えかけるために、「プレゼントしてあげるよ」のように「～テアゲル」を用いることもあるだろう。

社長: いや 一応社員それぞれの再就職先も見つけておいた¹². コネをつたって、
頼みである。 (『東京ラブストーリー 3』: 66-67)

社長の行為によって社員はみな恩恵を受けるため「見つけてやった」とすることも可能である。しかし、(26) では社長はあくまでも社長個人の行為として叙述しており、それが「見つけておいた」に表れている。

(27) A と B がレストランで食事後、支払おうとするが、B の子どもがぐずりはじめた。

A: いいよ。私が払っておくから。

(27) ここでは「払ってあげる」ではなく、「払っておく」を用いることによって、「払ってあげる」を含む「恩着せがましさ」が軽減されている。

授受補助動詞を用いると受益者や授益者が明示され、また「～テアル」「～テオク」でも行為者や行為の影響の受け手の存在が含意される。しかし、次のようにこれら補助動詞構文を用いないことによって、受益者の存在を示すことを避けることができる。

(28) 談合について相談しているところ。便宜を図ってもらったことを受けて、

あなたにも一つ椅子を用意せにゃあかんかのう。

(『サラリーマン金太郎』シナリオ)

(28) のように補助動詞形式を用いないことによって、授益者や受益者の存在に言及しないですむ。(28) では聞き手は「天下り先のポストを用意してもらおう」という恩恵を受けるので、「～テアゲル」を用いることもできるはずである。しかし、「～テアゲル」を用いないことで、あくまでも話し手の主体的な行為として述べられ、「恩着せがましさ」を避けることができる。特に(28) は聞き手に便宜を図ってもらったお礼として述べているので、「～テアゲル」を用いないほうが適切であろう。

4-2-5. 「+恩恵性」の「～テアゲル」のまとめ

「+恩恵性」の「～テアゲル」として①②を区別した。①②はいずれも「～テアゲル」を用いない表現も可能であるが、「～テアゲル」を用いることによって、話し手が、自分の行為、聞き手との関係、(Bが聞き手でない場合はその第三者との関係)をどのように認識しているかが示される。これらをまとめて表1に示す。

表1に示すように、①②は3.の(8)で述べた「～テアゲル」の持つ性質のうち、a(「立場が上であること」)、またはb(「親しい間柄であること」)のいずれかに焦点が当たっている。これらは語用論的な性質であるが、状況(文脈)だけでなく、AとBの相対的な関係によって、ど

¹² (26) の下線部は「見つけておいてあげた」とすることも可能である。また(27)も同様に「払っておいであげるから」も可能であるが、そうすると「～テアゲル」を含むため、やはり「恩着せがましさ」は感じられるであろう。

表1 +恩恵性の「～テアゲル」

	A	B	状況	聞き手に対する語用論的效果
①「上位」	話し手	聞き手	話し手が心理的に上位	頼もしさ・安心感など
	聞き手	第三者	聞き手に何か依頼する	聞き手を持ち上げる
②「親しさ」	話し手	聞き手	話し手が聞き手に接近	親しさ
	第三者	第三者	話し手はAがBを親しく思っていると認知	話し手の「見え」に対する同調を促す

ちらに焦点が当たるかが決まってくる。社会的な立場、情報量の差など何らかの点で「客観的に」上下関係にあることが認められれば①となり、そうでなければ②となる傾向が強いと考えられる。またabの性質は相互排他的なものではなく、濃淡の相違はあっても、①②にはabが両方含まれる。なお、親しさ、立場が上という語用論的な意味はいずれもプラスに捉えられた場合であるが、これらが逆方向に作用すると「恩着せがましい」「威張っている」というようなマイナスの評価になることも指摘した。

4-3. 「-恩恵性」の「～テアゲル」

次に「-恩恵性」の「～テアゲル」を見てみよう。受益者が特に存在しないにも関わらず、「～テアゲル」が用いられるものである。これは話し手が事態に関わっている「立場」をどのように認識しているかを示すものと考えられる。

4-3-1. ③ 聞き手よりも「上」の立場のものとして関わっていることを示す「～テアゲル」

話し手が聞き手よりも専門的な立場で事態に関わっていて、何らかの助言を述べるような場合に、「～テアゲル」が用いられることがある。次の例を見られたい。

- (29) (料理番組)ここでじっくり煮込んテアゲると、やわらかくなります。
 (30) (ラジオで、家の手入れについて述べている)

家を長持ちさせるには、毎日風を通シテヤルことが大切ですね。

上の例のように、事態をよりよくする方策を述べるような場合に「～テアゲル」が用いられている。これらはむしろ「～テアゲル」を伴わない表現のほうが一般的であろう。

(29)(30)は山田(2001)や豊田(1974)で非恩恵的意味の「～テアゲル」とされているものに相当する。山田(2001)はこの「～テアゲル」では影響を受ける人がいない、つまり受影者非存在であり、これを「事態改善用法」としている。山田ではなぜ「～テアゲル」が用いられているかについて述べられていないが、この「～テアゲル」は話し手が事態に、その実現を左右する力を持つ者として関わっている。いずれも一般論として述べているが、これらの発話を聞いて、聞

き手がそれぞれ自分の「料理」「家」に対して行動を起こすことはありうる。また山田は影響を受けるものがないと述べており、確かにこれらでは影響を受ける「人」はいない。しかし、「料理」や「家」などモノが影響を受けていると考えることができる。そのモノに対して、話し手は実現を左右する、つまり力関係で上位にいることになり、行為者(A)と行為の受け手(B)の関係は「～テアゲル」の本来持っている性質に一致している。

また話し手は聞き手に比較して専門的な知識や技術の点で上位にある。しかし、一方では聞き手は「客」など待遇的に配慮しなければならない相手でもある。そのため、何らかの方法で聞き手に対して「丁寧さ」を表したい、という気持ちが話し手にあり、その方策として「～テアゲル」を用いるのではないだろうか¹³。

4-3-2. ④ 話し手の思い入れを表す「～テアゲル」

最後に「～テアゲル」が話し手のBに対する思い入れを表すものとして用いられる場合について述べる。次の例を見られたい。

(31) 日本代表チームをワールドカップに行かせテアゲタイ。

(32) 田村に金メダルをトラセテアゲタイ。

(31)では「日本代表チーム」、(32)では「田村選手」に話し手の思い入れがあるが、「代表チームがワールドカップに行く」「田村選手が金メダルをとる」という事態の実現に、実際のレベルでは話し手はまったく関与していない。この場合、好意の対象である「を格」や「に格」で示される人物(団体など)が恩恵の受け手(B)と考えられる。「～テアゲル」は話し手がBの味方であるという話し手の立場の表明であろう。ここでは、応援する側＝行為者、好意を持っている＝「親しさ」と拡張して捉え、「～テアゲル」が用いられると考えられる。しかし恩恵のやりとりが実際にあるわけではない。Bは応援されて嬉しいかもしれないが、これらはBに直接述べられるわけではなく、通常Bは話し手の発話を聞くことはない。

4-3-3. 「-恩恵性」の「～テアゲル」のまとめ

③④のような「-恩恵性」の「～テアゲル」は、話し手と、聞き手あるいは受け手が「講師と客」、「解説者と聴衆」、「応援する側と競技者」のように社会的に規定される関係で関わっている場合に見られる。話し手は何らかの形で聞き手や行為の受け手に対する話し手の認識を示したと考えており、それを直接的に示す方策がないため「～テアゲル」が用いられると考えられる。以上をまとめて表2に示す。

¹³ これは「～テモラウ」を「(道案内で)次の角を右に曲ガッテイタダイテ…」のように使用するものと通じる部分があるように思われる。このように授受補助動詞を丁寧語として用いることについては稿を改めて論じたい。

表2 - 恩恵性の「～テアゲル」

	A	B	A-B の関係	話し手と聞き手の関係	聞き手に対する語用論的効果
③「上位」	話し手	第三者 (モノ)	所有関係	専門家と非専門家	丁寧さの表示
④「思い入れ」	話し手	第三者	ファンと競技者	制約は特になし	話し手の「見え ¹⁴ 」に対する同調を促す

表2に示したように、③では話し手と聞き手、④では話し手と第三者が、社会的に規定されるような「役割」を帯びて、状況に関わっている。「～テアゲル」を用いることによって、話し手が状況における自分の立場をどのように認識しているかが示されている。また③④は(8)にあげた性質のうち、③はaに、④はbに焦点があり、それを拡張して捉えたものと考えられる。この点で、③④は「+恩恵性」の①②と並行的な関係にある。

5. おわりに

本稿では「～テアゲル」を「+恩恵性」「-恩恵性」に区別し、それぞれの談話における機能を分析した。「+恩恵性」の「～テアゲル」は焦点を当てる部分によって、「AがBより上位にあるという話し手の認識を示す」(①)ものと「AがBに対して親しい気持ちを持っているという話し手の認識を示す」(②)ものに区別できる。①②では、AとBが話し手と聞き手であるのか、あるいはそれ以外であるのか、によって語用論的な機能が異なることを述べた。①②は話し手が関わっている相手を、心理的な上下関係や親しさにおいて、どう捉えているかを示すものである。ただし、聞き手が話し手と異なる見積もりを持っている場合は、聞き手は「～テアゲル」の使用をマイナスに捉え、「恩着せがましい」「威張っている」のように受け取る。これは聞き手の応答で判断できる。

また「-恩恵性」の「～テアゲル」も、「力関係で話し手が上にあるという話し手の認識を示すもの」(③)と、「相手に対する話し手の思い入れを示すもの」(④)に区別できる。①②と③④は並行的であるが、③④では話し手と聞き手(相手)は個人的な関係ではなく、社会的に規定された関係にあり、「～テアゲル」は話し手の「立場」を示すものとなっている。金久保(1993)は受身や使役によって、対人関係的にマイナスの影響を与えることを避けるために用いられる「～テアゲル」を「-恩恵性」としている。対人関係に配慮した結果として「～テアゲル」が用い

¹⁴ 宮崎・上野(1985)では「見え」を文学作品の理解において設定された視点からの見える様としている。ここではコミュニケーションにおいて話し手が「(何が)どのように見えているか」と考える。

られると考える点では、本稿の主張と一致する。ただし、金久保(1993)は「-恩恵性」として「～テクレル」や「～テモラウ」にのみ注目しているが、本稿では「-恩恵性」の授受補助動詞として、「～テアゲル」も用いられていることを指摘した。また、「～テアゲル」は一般的にはPPとして機能していること、しかし場合によっては「～テアゲル」の使用は不適切になり、それを避けるために他の表現が用いられることも指摘した。

以上、述べてきたように、「～テアゲル」は、恩恵性を利用して、聞き手に対する関係性の調節をするような機能(+恩恵性の場合)と、恩恵性の表示ではなく、状況における話し手の立場についての認識を示すような機能(-恩恵性の場合)に区別できることがわかった。これは山本(2002a)(2002b)で論じた「～テクレル」や「～テモラウ」の場合と一致する。今後は今回考察しなかった非恩恵的な意味を表すものも含め、授受補助動詞三系列全体からみて、各表現が対人的な機能において、どのように位置づけられるかを考察する必要があるだろう。

また宮崎・上野(1985)では話し手の視点を示す方が聞き手は理解しやすく、聞き手の共感を得やすいということが指摘されている。「～テアゲル」など授受補助動詞表現は話し手の認識を明示的に表現するものであり、聞き手は話し手の「見え」に同調しやすと考えられる。ここで述べたような言語運用を通して、話し手は聞き手に対して、話し手の「見え」を伝え、聞き手はそれを受け、聞き手の「見え」を伝えている。このようにして、話し手と聞き手は、お互いの関係性の認識を確認し、共有の認識を形成しているのではないか。授受補助動詞だけでなく、こうした関係性の規定をするような他の言語表現に関しても、対人コミュニケーション機能を考察していきたい。

例文出典

「ことば」:「自然談話資料 FD」現代日本語研究会編『女性のことば・職場編』(1999), ひつじ書房。

「東京」:『東京ラブストーリー』1, 3, 柴門ふみ(1990), 講談社。

「寅さん」:『男はつらいよ』日本語教育支援システム研究会, CD-ROM 版。

『サラリーマン金太郎』『お受験』映画シナリオ。

参 考 文 献

宇佐美まゆみ(2001)「談話のポライトネス—ポライトネスの談話理論構想」『談話のポライトネス』第7回 国立国語研究所国際シンポジウム報告書, 国立国語研究所編, 凡人社, 9-58.

———(2002)「B & L のポライトネス理論(2)」『言語』31巻4号, 大修館書店, 96-101.

金久保紀子(1993)「待遇表現としての授受表現」『日本文化研究』4, 筑波大学, 15-26.

城田 俊(1996)「話場応接態(いわゆる「やり・もらい」)—『外』主語と『内』主語—」『国語学』186号, 国語学会, 1-14.

泉子・K・メイナード(2001)『恋する二人の感情ことば』, くろしお出版。

豊田豊子(1974)「補助動詞『やる・くれる・もらう』について」『日本語学校論集』1, 東京外国語大学外国語学部附属日本語学校。

- 橋元良明 (2001) 「授受表現の語用論」『言語』30 卷 5 号, 大修館書店, 46-51.
- 益岡隆志・田窪行則 (1989) 『基礎日本語文法』, くろしお出版.
- 宮崎清孝・上野直樹 (1985) 『視点』, 東京大学出版会.
- 宮地 裕 (1965) 「『やる・くれる・もらう』を述語とする文の構造について」『国語学』63.
- 森本卓郎 (2000) 「基本叙法と選択関係としてのモダリティ」仁田義雄・益岡隆志編『日本語の文法 3 モダリティ』, 岩波書店, 3-78.
- 山田敏弘 (2000) 「日本語におけるベネファクティブの記述的研究 第 1 回 ベネファクティブの視点の位置と方向性」『日本語学』19 卷 11 号, 明治書院, 94-103.
- (2001) 「日本語におけるベネファクティブの記述的研究, 第 6 回, 非恩恵型ベネファクティブ」『日本語学』20 卷 4 号, 明治書院, 90-10.
- 山本裕子 (2001) 「聞き手とベースを共有することを表す『～ていく』『～てくる』について」『日本語教育』110 号, 日本語教育学会, 52-61.
- (2002a) 「『～テクレル』の機能について—対人調節的な機能に注目して—」『言葉と文化』第 4 号, 名古屋大学国際言語文化研究科日本言語文化専攻, 127-144.
- (2002b) 「『～テモラウ』の機能について—『～テクレル』と対比して—」『紀要—人文・社会編—』第 48 号, 名古屋女子大学, 263-276.
- トマス, J. (1998) 『語用論入門—話し手と聞き手の相互交渉が生み出す意味—』浅羽亮一監修, 研究社出版.
- リーチ, G. (1987) 『語用論』池上嘉彦・河上誓作訳, 紀伊国屋書店.
- Brown, P. & Levinson, S. (1987) *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge University Press.
- Obana, Yasuko. (2000) *Understanding Japanese*, Kuroshio Publishers.